

しかし当時、一般人に聖書は行き渡っていませんでした。まだ印刷術は無かったし、仮に聖書が手元にあったとしても、ラテン語という難解な言語に翻訳されており、一般人は読み書きできないので、それを読めなかったと思うんですよ。聖書が無かったのは非常に大きな問題でした。

②“ローマ教皇には天国を開く鍵がある”と信じられていたのです。ローマ教皇には天国を開いたり閉じたりする鍵がある。ということは、ローマ教皇から「おまえ、無理！」と言われたら、天国の扉がガチャッと閉められてロック掛けられるから天国に行けない。教皇が（*戦争に）行けと言っているのに行かないのは、これは天国に行けないことになりかねない。中世時代のヨーロッパは非常に信心深い人たちが生活していたので、ローマ教皇のスピリチュアルな権威にひれ伏したということがあると思います。

③当時の背景に世紀末思想があったんです。ウルバヌス 2 世が“十字軍で突撃しろ”と命令出したのは 1095 年です。実際にエルサレムに到着するのは 4 年後ですが、1095 年/11 世紀末、あと 5 年で 1100 年という時に命令したんですね。その頃、“間もなく患難時代が来る”という、怪しげな年代計算をする教えが流行っていたのです。

黙示録を見ると、最後の戦場はエルサレムだと明記されています。エルサレムで膝まで血に浸かっているような、凄まじい戦場の様子が出て来ますよね。エルサレム奪還戦争と、黙示録の最後の戦争が結びついたのでしょう。普通に考えたら“それは別々の話”となるんですが、聖書を持ってないし、日本でいうなら末法（まっぽう）思想に脅かされた時代のようなものです。それで踊らされてしまったというのがあるんですね。

聖書が語っている信仰は、迷信ではなく・妄信でもなく・狂信でもないんです。信仰と狂信を区別するものは何でしょう？ それは、信ずるに足る根拠を持っているかどうか。それを聖書の中に見出すことが出来るかということです。カルトな現象やおかしな教祖が言い出した言葉、そんなものは根拠にならないんですね。しかし残念ながら、当時の人々は聖書を持っていなかった。

こうして第 1 回目の十字軍が始まりましたが、初めに進撃したのは一般商人・農民・町民ですよ。そんな普通の人たちが、大した武具も持たずに突っ込んで行って、イスラム軍に蹴散らされて、散々な結果に終わってしまいました。

その後で騎士・兵士軍団が突入しますが、一旦コンスタンチンノーブルに行って、そこからエルサレムに向かって行きました。フランスからエルサレムに向かうまでの途中途中でユダヤ人の共同体があったんですが、ユダヤ人の集落を見つけると、手当たり次第に襲撃して皆殺しにしていたんです。何しろローマ教皇が、「キリストの敵を殺すことは聖なる戦いで、それによって天国に行ける」と言ったものだから、「エルサレムに行く手前にキリストの敵であるユダヤ人がいるのなら、いてまえ！」そして、ユダヤ人からふんだくった物を軍資金にして前進し続けた。全く酷い話です。

エルサレムに着いた時には、数万人のユダヤ人、またイスラム教徒、女も子供も文字通り皆殺しですよ。同行した神父が「エルサレムはくるぶしまで血だまり・血の海になっていた」と書いています。この血まみれの十字軍兵士たちは、聖墳墓教会に行って「神に栄光あれ！」…神が喜びますか？ 全くバカなことをやったもんです。こんなことは、イスラム国やアルカイダがやってることと同じじゃありませんか。

ただ一つ、この事を話すときに言わせていただきたいことがあります。

エルサレムのユダヤ人たちが十字軍によって皆殺しにされるのを見た時、エルサレムにいたカトリックの神父たちは懸命に庇うんですよ。教会の中に匿ったり、秘密の逃げ場所や通路で逃がしたり、何とか安全な所に行くように匿ったんです。

カトリック教会のトップは「やって来い！」と言うけど、同じカトリック教会の一員である神父の中には、トップの判断に眉をひそめる まともな神父たちがたくさんいたことも忘れてはなりません。

それはともかく ここで注目したいのは、ユダヤ人はエレッツ・イスラエルに住んでいたということです。十字軍時代にもエルサレムに住んでいた。現在パレスチナと呼ばれている各所にユダヤ人コロニーがあったんですね。セルジューク・トルコのイスラム帝国時代、エルサレムに住むためには非常に高い税金を納めなければなりませんでした。特にユダヤ人は、イスラム教徒からは税金取らない。ユダヤ人からはたくさんの税金を取ったんですが、それでもユダヤ人たちはエルサレムに帰ったんです。

ハイファという町にはユダヤ人の大きな共同体がありました。全部、十字軍によって全滅ですよ。その十字軍が攻めて来た時、イスラームの軍隊とユダヤ人たちは一致団結して戦った。だから、イスラム教徒とユダヤ人が一致できないということはないです。歴史上はそういうことがあったんですね。

こういう戦い、十字軍は1回だけじゃないんです。8回くらい繰り返して、最初の十字軍から最後急速に立ち消えて行くまで200年！エルサレムを巡って200年、十字軍はイスラム軍と戦争したんですね。こんなバカな戦争を200年も続ける羽目になった 最初の命令を出したウルバヌス2世、そして、その跡を継いだ200年間の歴代ローマ教皇は「もうバカバカしいからやめよっ！」って、なんで言わないの？なんで第2次十字軍・3次・4次・5次・6次・7次と続けたんでしょう？ メリットがあったからです。

ここで、なぜ教会が 人類歴史の汚点となるような犯罪をやったのか、について考えたいのです。なぜローマ教皇が、平和に暮らしている人たちに襲いかかるようなことを命令したのか？端的に言うと、聖書が語るクリスチャンではなかったからです。ローマ教皇自身が。儀式は守ってますよ。教会で偉い席に座っているでしょう。荘厳なコスチュームに身を包んでおられる。しかし、クリスチャンかどうかについては非常に疑わしいですね。

昔『ゴッドファーザー』という映画を見ました。タタタ タタタタ タタタタ〜♪、もう思い出しますわ。シチリア・マフィアのドン、普通は一般市民の顔をしてるけど闇の仕事をする。密売・殺人・ヤクザの色々な抗争をやる。印象深いシーンは、マフィアの凄腕のプロの殺し屋/暗殺者が、カトリック教会の懺悔室に入って神父に懺悔するんです。「私は人を殺してしまいました。赦してください。」涙流して「ごめんなさい。」そして、懺悔室を出て次の殺人に行く。

これって、悔い改めと言えますか？ 一応「ごめんなさい」と言ってるでしょう。「神様」と言ってるでしょう。涙も流したでしょう。でも、これ全部 宗教的なファッションにしかかってない。本当の悔い改めじゃない。本当の悔い改めというのは、彼が行く所は教会の懺悔室じゃなくて、警察に行って自首すること。そして、そこで罰を受けるということです。逃げ回るための隠れ蓑として 宗教的な行事に身を隠しているだけの話であって、こんなものは本当の悔い改めと言わない。

だから、教会に行っているからクリスチャンとか、宗教的行事に参加しているからクリスチャンとか、「神よ」と口にしたらクリスチャン、とは言えないのです。そういうことが、ローマカトリックのトップにまで及んでいた時代があったんです。今は違うと思いますよ。でも、中世の暗黒時代においては、“どう考えても これはクリスチャンじゃない”という人がローマ教皇の位に就いていますね。

なぜこんなことになったのか、ということをお話ししなければなりません。

313年にローマがキリスト教を公認するまで、クリスチャンは大迫害を受けていました。

迫害の理由は反政府運動をしたからじゃないです。そんなこと一切しません。

新約聖書には、「建てられている権威に従いなさい。その権威者が神に従わない者であったとしてもちゃんと従いなさい。税金もちゃんと納めなさい。市民の義務は果たしなさい」と書いてあるんですよね。

しかし、唯一出来ないことがあります。その為政者が 聖書が明確に禁じていることを命じた場合は、それに従う義務はないんです。

実は、ローマ帝国は途中から、非常に厳格な皇帝礼拝を強要するようになってしまったのです。

特にドミティアヌス（在位 81-96）の頃から、皇帝を神/現人神（あらひとがみ）として拝むことを強要するようになったんです。当時のクリスチャンたちは、他のことなら積極的に協力するし、市民の義務を十分に果たす善良な市民たちでしたが、偶像礼拝だけは出来ません。皇帝礼拝だけは出来ない。

そのことで大迫害を受けるんです。

それで、彼らは公に集まることが出来ません。どこに集まったと思いますか？ カタコンベです。

カタコンベはイタリア語で“地下墓所”。当時は火葬ではなくて土葬なので、遺体はローマの地下に埋めて行くんです。亡くなる人はたくさんいるので、掘って掘って、ローマの地下深くにまで墓場を作り、網の目のようにトンネルが張り巡らされ、あまりにも複雑な通路になったので、ヘタに奥まで行ったら生きて出て来ることが出来なかった。そこに安置されているのは遺体や骸骨。そして、ヘタしたら生きて出て来れない可能性がある。なので、まともな人はそんな所に行かない。足を踏み入れない。

クリスチャンたちはそこに着目して、地下の墓場で集会を持っていたんですね。

そうでもしなければ、逮捕され・拷問を受け・迫害され・十字架に掛けられ、ローマ皇帝を拝まないという理由だけで、もう酷い目に遭って来たのです。この 313 年までの間にクリスチャンになるということは、地上での現世的な幸せを諦めるということに等しかったんですね。

クリスチャンになるということは、出世を諦める。家族がバラバラになる。命をいつ落とすか分からないような状況の中に入る。覚悟なしでは、とてもじゃないけどキリストを信じるなんていう決心は出来ない。

そんな状況の中で、それでもイエスは救い主だと分かった人、それでも死の解決はイエスにしかないと思った人、罪の赦しはイエス・キリストにおいて本当にあるということが分かった人たちは、イエス・キリストを信じていったんですね。そして、その数が増えていきました。なにしろ 1 世紀・2 世紀、イエスの弟子たちから薫陶を受けている人たちがローマにもいたので、迫力あったと思いますよ。

なによりも、その犠牲の上に神様の力が働いて、クリスチャンたちが爆発的に増えていったのです。

313年にローマ皇帝コンスタンティヌスのお母さんがクリスチャンになったことで、お母さんを迫害するわけにはいかん。それで、コンスタンティヌスがキリスト教を公認しました。

そして自らも、「俺もクリスチャンになる」と言うわけですね。となると、どうなりますか？

今までは、クリスチャンであることは、ローマ皇帝に反対することなので目の敵にされた。だからクリスチャンにはなるまい、と恐れていた人が多いでしょう。

しかしこれからは、クリスチャンでないことがローマ皇帝の気に入らんことになって行く。

それなら、本当には信じていなくても、或いはキリスト教の中身がよく分からなくても、出世のために、ローマ皇帝の心証を良くするために、世渡りの 1 つの資格として、キリスト教徒になっただけで得とちゃうか。ということで、我も我も。私もクリスチャン。私もクリスチャン。そうなるんですね。

392 年になると、今度は国教化されるんです。国の宗教。ローマ人は全員クリスチャンにならなければならぬ。そしたら、クリスチャンの共同体ってどうなりますか？ 中身が変質しますよね。迫害の覚悟なしにはクリスチャンになれないという時代の教会は、もう本物のクリスチャンたちで構成されている共同体/教会でした。

それがですねえ、クリスチャンになつていこうが政治的にも世的にも得やでと。下心あって一応クリスチャンになつてこか。そんなメンバーが入って来ると、本当には信じていない人が教会にどんどん入って来る。しかも、そんな人たちが教会の多数派になったときに何が起こるでしょう？ 教会で何か決めるとき、聖書に基いて決まるのではなく、構成メンバーが世の中で持っている権力・カ・お金の量などが、教会の中にガバガバ入って来るんですね。信仰による共同体であったはずの教会が、世的な権力が絡む政治結社に変質するのです。カトリック教会は、モロにそのあおりを受けたと思います。

中世時代 カトリックの教皇であることは、西ヨーロッパの政治権力をも左右する力があつたわけで、当然政治的にプラスかマイナスかということが、様々なことの判断材料になって行く。これはもう 教会と言えないような、クリスチャンと言えないような人が、教会のトップに居座ってしまうことになり、その人物が下す決定は、聖書のどこにも書いてないことを堂々とやり出すんですね。

なぜ教会がキリストの名を使って、誰が見ても犯罪行為にしか見えないことをやったんでしょうか？ その当時の教会のトップが本当のクリスチャンではないからです。ニセクリが本当の教会のトップに居座って、その権力を欲しいままに間違つたことをさせた。これが大きな理由だと思います。

同時に、無知もあると思います。十字軍以降、ユダヤ人迫害をすることが、宗教的に肯定的意味を持つような風潮を作ってしまったんですね。このことは後に、ユダヤ人にとって大きな災難になりました。十字軍以降、ユダヤ人に対する迫害が宗教的理由に由来するものとなって、常にユダヤ人たちを脅かすようになってしまうのです。ユダヤ人がキリスト教に近づかない理由の 1 つは、キリストの名前で迫害されたという苦い経験があるからです。

しかしそのようなことは、聖書をまともに知っているならば、読んでいるならば、絶対に出て来ないはずの態度です。聖書は一貫して〈アブラハム契約〉が根底に流れているからです。アブラハム契約は、“ユダヤ人を祝福する者は祝福され、ユダヤ人を呪う者はのろわれる” ということでしたね。

十字軍で何ですか？ ユダヤ人を呪う行為ではありませんか。ユダヤ人迫害で何でしょう？ ユダヤ人を呪う行為ではありませんか。聖書が「それだけはやるなよ！」と言っていることをする。“それがキリストを喜ばせることだ” と、まことしやかに間違つたことを教えていた。それが大きなつまずきとなっているのです。クリスチャンは悔い改めて、ユダヤ人の回復のために祈るべきではないかと思ひます。

私たちも、教会と名前が付いているからといって安心してはなりません。聖書が何と言っているのか。ここにこだわって行くことが一番大事で、安心出来ることだと思います。

このシリーズはまだまだ続きます。言いたくないこともね、赤裸々にお伝えして行こうと思ひますので、どうぞご参考になさってください。それではまた『ごうちゃんねる』でお目にかかりましょう。それまで皆さん、ごきげんよう。さよなら!!

* 使用した聖書は『聖書 新改訳 2017』です。